

19) 歯科医でもあった俳人 西東三鬼

Sanki Saito as Haiku Poet who was formerly a Dentist

大垣女子短期大学 下総高次

Takaji Shimoosa, Ogaki Women's College

西東三鬼：明治33年（1900）5月15日、岡山県生れ。6歳のとき父死去。病弱のため進学遅れる。18歳のとき母親死亡。東京の長兄武夫の許に引きとられる。大正10年（1921）4月、21歳。日本歯科医専入学。乗馬部に加い、ダンスに長じる。大正14年（1925）3月、25歳。日本歯科医専卒業。11月結婚。12月、長兄武夫の指示に従い、シンガポールに渡航し歯科医院を開業。大正15年、26歳。英国風の洋館に住み、自家用車を乗り廻す。昼はゴルフ、夜は近東地方の友人と交遊し、大いに青春の血を燃やす。一方、日本古典文学書を耽読。

昭和3年（1928）、28歳。田中内閣の第2次山東省出兵による済南事件起り、在留邦人や日貨排斥始まる。11月、三鬼チフスに罹り休院。大患と不況のため失意悶々として帰国し、5年に亘る海外出張の幕を閉じた。12月、東京市大森に歯科医院を開業。昭和7年（1932）、32歳。自営を廃業。埼玉県朝霞総合診療所歯科部長に就任。診療所3ヶ月後に分散。

昭和8年（1933）、33歳。東京神田の共立和泉橋病院歯科部長の職を得る。ここで朝霞診療所での泌尿科医師と再会。同医師と患者たちの勧めで俳句に関わりをもつ。筆名 西東三鬼を使う。昭和9年（1934）、34歳。「走馬燈」同人となる。「ホトトギス」（高浜虚子）、「馬酔木」（水原秋桜子）に入選。「京大俳句」に特選。誓子選「断雲集」（京大俳句）に首位入選。4月、平畑静塔のすすめにより、「京大俳句」同人となる。昭和11年（1936）、36歳。「京大俳句」の選者となる。この頃、俳句開眼とされる“水枕ガバリと寒い海がある”の句成る。「京大俳句」は、昭和10年頃より「無季俳句」へと転進し、三鬼、赤黄男、白泉らが先頭に立った。新興俳句は、昭和12年7月、日中事変勃発を契機に、「戦争俳句」（前線俳句、戦火想望俳句）へと更に転進した。昭和13年（1938）、38歳。2月、胸部疾患再発のため入院し、4月退院。12月、

歯科医を廃業。合資会社「紀屋」に入社、別に「南方商会」をつくり商売人となる。

この1年、「無季俳句」の実作に没頭し、戦争を主題にした「戦火想望俳句」のみを作った。

京大俳句事件：昭和12年日中事変以来、「京大俳句」は、ひたむきに「新興俳句」（いわゆる生活俳句、リアリズム理論）への道を進んで行った。即ち「新興俳句」は、自然諷詠のみを扱う域を脱出して、拡大する戦時下の社会現象、生活感情に深く関わって行った。この新興俳句運動の主流に立つ「京大俳句」に対し、国家権力は、にわかに弾圧を開始したのである。

昭和15年（1940）、40歳。2月14日、平畑静塔をはじめとする関西在住の8名が、京都特高警察によって一斉検挙を受け、5月3日、東京在住者4名、残りの関西在住者2名が検挙された。8月31日、三鬼は特高警察に検挙され、京都松原署に連行された。結果；当局の予期した共産主義者はいなかったが、静塔以下3名が起訴され、懲役2年執行猶予3年の判決があり、他は不起訴となる。11月、三鬼は起訴猶予となり、俳句執筆を禁じられて帰京を許された。以上は暗黒時代を象徴する事件であり、輝かしい新興俳句の終焉であった。翌昭和16年（1941）、太平洋戦争起る。

昭和17年（1942）、42歳。12月、三鬼は東京を出奔し、単身神戸に赴く。官憲により俳句を取り上げられ、自ら家族とも隔絶した三鬼は、戦時下日本の外地とも言うべき「各外国人のハキダメの如き」ホテルで、奇妙な人達と国内亡命者のような多彩な日々を過した。この放浪時代を回顧執筆した自伝「神戸・続神戸・俳愚伝」は、昭和52年（1977）、NHK総合テレビで、「冬の桃」と改題され、4月7日～5月9日まで7回放映された。

昭和20年（1945）、45歳。終戦。治安維持法・特高警察は廃止され、政治・思想犯とされた連中は釈放された。多くの俳句誌がこぞって創刊された。三鬼は「有季俳句」を志向し、すぐれた作品

を残していく。

昭和 23 年 (1948) 48 歳。「天狼」を創刊し編集にあたり、「激浪」を創刊し指導にあたる。兵庫県別府町に移る。9 月、「自註句集 三鬼俳句」(現代俳句)、第二句集「夜の桃」(七洋社)を刊行。12 月、平畑静塔の斡旋で、大阪女子医専附属香里病院歯科部長に就任し、病院近くの大阪府寝屋川町(香里園)に移住した。

昭和 27 年 (1952), 52 歳。3 月、第三句集「今日」(天狼俳句会)刊。6 月、主宰誌「断崖」創刊。

昭和 28 年, 53 歳。長兄武夫死去。

昭和 31 年 (1956), 56 歳。角川書店就職のため、香里病院を辞職。以来、三鬼は歯科医の職業と全く断絶した。10 月、角川書店に入社、「俳句」編集長に就任。昭和 32 年, 57 歳。角川書店を退社。専門俳人として一本で立つ。

昭和 33 年～「断崖」同人のため、国内各地を旅行し句会に出席。

昭和 35 年 (1960), 60 歳。5 月 3 日、第 8 回「断崖祭」神戸に出席。6 月 11 日、東京虎の門共済会館で、俳壇あげて三鬼の還暦祝賀会。

昭和 36 年 (1961), 61 歳。8 月頃より胃の調子悪し。10 月、横浜市立大学病院に入院、胃癌の手術を受く。11 月退院、静養。

昭和 37 年 (1962), 62 歳。1 月、「断崖」百号記念選集刊。2 月、第四句集「変身」角川書店より刊行。3 月、癌転移のため病状悪化。4 月 1 日、12 時 55 分、葉山町の自宅で永眠。

歯科医であり、俳歴わずか数年にして新興俳句の先駆者となり、鬼才、天才とうたわれた俳人「三鬼」の惜しまれる死であった。